

STが健診や事後フォローに関わる場合の留意点

STが健診や事後フォローに関わる場合の他職種との連携や保護者への対応やSTとしての知識などの留意点について自由記述で尋ねた。その記述を「相談の進め方やその内容といった形式」「他職種との連携について」「相談時の養育者や子どもへの接し方や配慮」「STが持つべき知識や経験、基本的な立場」「その他」に分類した(図11)。

養成課程で健診について教えられる必要性和理由

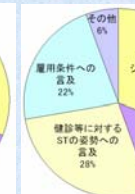
ST養成課程で健診について教えられる必要性について/はい/いいえ/分からない/養成校に任せる/の4者択一で尋ねた。

続いてその回答理由を尋ねた。「教える必要がある」は27名中25名、「必要ない」が0、養成カリキュラムなどの関係で「養成校に任せる」「分からない」との回答が1名ずつあった。必要であると回答したSTの選択理由を「健診や事後フォローにおけるSTとしての対応について知る必要がある」「子どもの発達に関する全般的な知識が必要」「子どもを取り巻く社会資源の理解が必要」「健診の内容や他職種についての理解が必要」「その他」に分類した(図12)。

STと乳幼児健診をめぐって感じていること

その他の質問項目として乳幼児健診全般にわたって感じていることについて自由記述で尋ねた。それらの記述を「健診システムについての言及」「健診を通して見える育児の現状についての言及」「健診に対するSTの姿勢・あり方についての言及」「健診等に関わるSTの雇用条件についての言及」「その他の言及」に分類した(図13)。

図10. ST必要性の記述内容 図11. 関わる上での留意点 図12. 養成課程での教育 図13. STと健診をめぐって



5. 考察・今後の課題

健診等への参加の仕方、関わり方について

継続的関わりや日常的な意見交換のしやすさなどの観点からは常勤が望まれる。一方、非常勤で複数の自治体等に関わっている場合には、他自治体での実践を生かせるというメリットも考えられる。地域により事情が大幅に異なるため、普遍的に望ましいやり方を提示することは難しい。これらを踏まえ、さまざまな自治体でのSTの関わり方の事例を集め、それらを共有し実践の参考にできるような調査・蓄積が行われることが望まれる。

保健師との子どもを観察する視点の共有について

健診では、STが全ての子どもに会うことは時間的に難しい。しかし、STが集団で様子を見るときに気になりつつも個別相談につながらないケースが少なからずある。ここで見落としをしないためには、健診の中心となる保健師など子どもを観察する際の観点について日頃から意思疎通を図っておくことが必要であると考える。また、そのための指針の作成も考慮されるべきと思われる。

健診や事後フォローでの連携の大切さについて

健診や事後フォローはそれだけで完結せず、親子への支援の入り口である。この点で、地域の社会資源との連携は特に大切で、健診等に関わる上での留意点でも、連携の大切さへの言及が多かった。また、養成課程に関する項目でも、健診の内容や他職種への理解、社会資源の知識など連携に関する記述が多かった。

健診や事後フォローに関わるSTが持つべき発達の知識について

健診等に関わる場合の留意点、養成課程において教えられる必要性の記述内容では、定型発達に関する知識が養われるものも多く見られた。定型発達についての知識は「ちょっと気になる」ことへの適切な気づきに不可欠であると共に、親に適切なアドバイスをするために必要だからだと考えられる。

難聴疑いの子どもに対する対応について

健診での、聴力チェックへのSTの関わりは全ての子どもに対して関与する自治体から直接関与しない自治体まで様々であった。これは、自治体により対象児数の違いや使用できるチェックの方法、健診会場での周囲の騒音などの違いによるものと考えられる。また事後フォローでは、何らかの機器を使用可能な自治体は多くなく、多くは子どもも行動観察をして専門機関に精査を依頼していることがうかがえた。自治体等によって事情が異なっているため、関与するSTはそれぞれの自治体等の実情合わせて難聴疑いの子どもを見逃さないよう関与することが必要と考えられる。

ことばの相談というニーズに応えることについて

1歳6ヶ月児健診、3歳児健診での相談には、ことばや構音、社会性の発達などの問題も多く見られる。そのため、健診や事後フォローにSTが関わることは、これらの相談ニーズに応え、早期対応につなげるという点で必要である。しかし、この時点で明確に障害だとは言いつけない「向上になる」状態であることも多く、障害への対応だけでなく、親の育児スキルの上という視点での対応も強く求められる。この点が養成課程で健診等について教えられる必要性の理由として、また、関わる上での留意点の言及で最も多く見られた。

健診と事後フォローの中での軽度発達障害への対応について

健診などで「ちょっと気になる」子ども、特に明確なことばの遅れがはっきり見えない軽度発達障害の可能性のある子どもの場合は、親に相談の動機付けやリードがないことが多い。そのような親子を着実に相談・支援にのせるためには、子どもの様子や行動を親と同じ場で共有し、子どもの持つ問題を確認しあうという姿勢が大切であろう。今後、そのための研究が蓄積され指針や研修などが整備されることが望まれる。これは職能団体としての課題かとも思われる。